第３２回医療薬学公開シンポジウム開催報告

弘前大学医学部附属病院薬剤部
早　狩　　誠

平成１９年１１月２２日（土）、ホテルクラウンパレス青森（青森県青森市）において、日本医療薬学会主催、東北病院薬剤師会および青森県病院薬剤師会、ならびに青森県薬剤師会後援にて標記シンポジウムを開催いたしました。

近年病院薬剤師を取り巻く環境は、大きく変わって参りました。一つには、薬学部での教育制度が、従来の４年制から６年制に移行したことであります。臨床の現場で薬に関わる多くの情報を活用し、「くすりの専門家」として適切な薬物療法に貢献できる薬剤師が輩出されることになる訳ですが、病院や保険薬局での約５ヶ月間にもおよぶ実務実習教育は、実習を受ける薬学部学生にとっても、実習を担当する薬剤師にとっても大変重要な意味を持つことになると考えます。我々薬剤師は、よりクオリティーの高い薬剤師の育成に、実務実習を通じて積極的に貢献する必要があるとともに、自らも日々研鑽を積む必要があると考えます。

また、平成１９年４月よりがん対策基本法が施行され、癌治療の均てん化が示されました。さらには国策として後発医薬品の使用促進が推進されて来ております。このような情勢は、病院薬剤師のみならず各調剤薬局に勤める薬剤師も含め、化学療法に関する専門的知識はもとより、多くの医薬品に関する情報を身に付けておく必要性が求められております。しかしながら、医薬品が適正に使用されていても、患者個人は一様ではなく時として想定外の反応を生じることが多々あります。このような患者に生じる想定外の生体反応に対応するためには、それらの原因を探求する心、即ち科学（サイエンス）する心を持つことは大変重要なことと考えます。日常の業務の中の疑問点も含め、想定外を想定内に変え情報を共有化していく姿勢こそ我々薬剤師に求められている「顔の見える薬剤師」の一端を担うものかと考えます。

このような観点から本公開シンポジウムでは、医療人としてのサイエンスの心を持ち想定外を想定内とする業務の実際ならびに技をテーマとして３名の講演者によるシンポジウムおよびパネルディスカッション、そして特別講演を行いました。まずシンポジウムでは、新潟大学医歯学総合病院薬剤部 杉山健太郎先生より「当院が実施する腎移植患者のファーマシューティカルケア：免疫抑制薬の感受性試験と服薬指導」と題した講演を頂きました。杉山先生は講演の中で、「感受性試験を実施して患者毎に適切な免疫療法を行っても、服薬アドヒアランスが低下している症例では拒絶反応が発生し、移植腎の廃絶に繋がりかねない。従って、このような患者への服薬指導は重要な意味がある。」と力説され、感受性試験と通じた処方設計、服薬アドヒアランス維持を目的とした服薬指導の重要性を示して頂きました。

次に、秋田大学附属病院薬剤部，岩澤さあや先生からは、「認知機能評価MMSEを用いた内服薬管理能力評価」と題した講演を頂きました。服薬コンプライアンスが病気の進行、悪化、再発防止に極めて重要な意義があることから、特に認知機能の評価と服薬コンプライアンスの関

係について検討され、MMSEでの評価が低い患者群（低値群）では自己管理が困難であり、介護者等の服薬サポートが必要であることや、MMSEが低値群より高いが正常値より低い群では服薬能力が低下する可能性があり、服薬状況の確認や服薬方法の工夫および強化などの必要性が示されました。これらの結果から、認知機能が低下している患者への服薬指導に対し、MMSEが有効であることを示して頂きました。

更に、弘前大学附属病院薬剤部、新岡丈典先生からは、「薬物動態を考慮した薬剤管理指導業務の個別化」と題した講演を頂きました。近年、高度化する薬物療法において薬剤師の業務は多岐にわたり、薬物動態に関する知識が要求されるようになった。特に薬物代謝酵素の遺伝子多型を介した薬物相互作用に関する情報は薬物動態を理解するうえで重要性が増している。本講演では、真菌症治療薬ホスフルコナゾールが継続投与されていた患者へのワルファリンの投与が開始されたことへの薬剤師の関与や薬物代謝酵素（CYP2C9）の遺伝子多型が肝移植後に臓器提供者の型に移行すること等を講演して頂き、薬物動態を考慮した質の高い薬剤管理指導が必要であると述べられました。

最後に、特別講演として東北大学病院薬剤部、眞野康成先生からは、「胆汁酸関連タンパク質のマススペクトロメトリー」と題した講演を頂いた。胆汁酸で刺激した培養細胞から、特異的に胆汁酸に結合するタンパク質を分離し、高感度な質量分析計を用いた構造解析を行い、数多くのタンパク質を明らかにしました。また、従来脳には存在しないと考えられていた胆汁酸の存在をラット脳で明らかにし、さらにその胆汁酸に結合するタンパク質も明らかにし、脳内胆汁酸の機能の解明が期待されました。眞野先生の講演では、サイエンティストである薬剤師の研究へのアプローチの最新技術や、その技術により得られる重要性に就いて講演を頂きました。

以上の講演を通じ、自らの質の向上や研究を目指している多くの薬剤師の方に、少しでも勇気を与えることが出来たかと存じます。

最後に多くの貴重な御提言を頂戴したシンポジストの諸先生をはじめ、進行役の青森大学薬学部 中村郁子教授ならびに参加を頂き活発な討論を行って頂いた多くの諸先生に、深く感謝を申し上げます。

61 名